

---

# 天空の難破船 | 撮影編 -side Kaito-

翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天空の難破船―撮影編 - side Kaito -

### 【Nコード】

N0149M

### 【作者名】

翠

### 【あらすじ】

【快斗 蘭】「天空の難破船」の原作絵ポスター撮影風景の快斗サイド。

拍手おまけ話あり

白い手袋をはめた手が少女の白磁の肌に伸ばされ、その顎を優しくつまみ上を向かせる。お互いの瞳の中に他のものを映すのを拒むかのように、ずっと二人の視線は合わされたままだった。

そして、全身を神聖なる色　純白に身を包んだ怪盗紳士は、顔を心もち傾けるとそっと少女の唇に近づける。

顎にかかるその手が、少し震えていることに誰が気づいただろうか。

あと少し……。

二人の唇が触れるか触れないかのところで無粋なドアの音が響き渡り、小さな少年が少女の名前を叫びながら飛び込んできた。

興を削がれた怪盗紳士は軽いため息をついて少年を見やる。そして、口の端をくっと思ち上げ不適に微笑んだ。

「よう。また会ったな、名探偵」

「……っ！……キッド」

「カッーーーーー！ト！！！」

あたりの張り詰めた空気が一瞬にして緩む。止まっていた時が再び動き始めたかのように、スタッフがめいめいの仕事をするために忙しそうに動き回り始めた。

快斗は目を閉じて小さく息を吐き、思考を切り替えると、ゆっくりと理知的な瑠璃色の瞳をのぞかせながら顔を上げる。

「お疲れ様ー！ 続いてポスター撮影始めるから、黒羽君と毛利さんはそのままね。ああ、毛利さんは衣装チェンジ。だれか、連れて行ってあげて」

「大丈夫？ 蘭ちゃん」

腕の中の少女の異変に気づき、蘭を迎えに来たスタッフを手で軽く制すると、少しかがんで蘭の浅紫色の瞳をとらえた。

どうやら緊張と照れからか、のぼせたようになっていいるらしい。

顔だけでなく耳まで真っ赤になっており、小刻みに震えてわずかに快斗に身を預けている様子はなかなかそそのめるものがあつたが、どうしたものかなと快斗は考えた。

「いつまで蘭姉ちゃんにくつついてるのさ」

怒気を含んだ声に振り返ると、先ほど、演技とは思えない真剣さで彼女の名前を叫んだ小さな少年、江戸川コナンがいた。

さすがに、芝居とはいえ、他の男の腕の中にいるのは見たくもねえってか？

快斗はコナンの不機嫌な理由が手にとるほどわかった。だが、ライバルのご機嫌を取る趣味などは持ち合わせてはいない。

「おやおや、名探偵。お姫様が気になるのかな」

「離れるよ」

「年上のオニーサンに向かってその言い方は感心しないなあ……なあ、ボウズ」

快斗は眉を上げ口の端を持ち上げると、コナンを挑発するかのように蘭の腰を引き寄せる。

見えない火花が二人の間に飛び散る中、甲高い声が割って入った。

「ハイハイ。どいたどいた。蘭、大丈夫!？」

今回のCM撮影のスポンサー、鈴木次郎吉のいとこの娘となる鈴木園子である。園子は蘭に駆け寄ると快斗から引きはがし、熱を測ったり扇いだりしてかいがいしく世話をしていた。

「だ、大丈夫。ちょっと緊張しちゃって……」

弱々しい声でほてった頬に手をあてながら答えるいじらしい姿に、快斗の心臓はドクンと跳ねる。

「仲がいいんだな、園子さんと蘭ちゃんは」

人懐こい、にこやかな笑顔で親しげに名前を呼ぶ快斗に、園子は眉をひそめて口を開く。

「ねえ、黒羽君。なんで、蘭は『蘭ちゃん』で、私は『園子さん』なワケ？」

「へ？ うーん……なんとなく」

「なんとなく？」

腰に両手を当て半分座った目で快斗を睨めつける園子に、快斗は内心汗をかきながら、しかし笑顔は崩さずに答える。

「やはり、鈴木財閥の令嬢というだけあって、園子さんからは凛としたオーラを感じるんだよね。だから思わず『さん』ってつけちゃう。まあ、内面からにじみ出る気品ってやつがそうさせるのかな」

「あら、やだ。やつぱりそうかしら」と満更でもない様子の園子に、うんうん。とうなずきながら、快斗はさり気なく蘭の頭を撫でて「あ、蘭ちゃんはとってもあたたかくてかわいいから『ちゃん』ってつけちゃうんだぜ。また全然違うかな」とフォローを入れる。それを見て園子は肩をすくめた。

「なんなの、この手の顔は蘭に甘くなるよう出来てるワケ？ 外見はキッド様にそっくりなのに中身はてんでお子様ね！」

「『この手の顔』というと、オレに似ている……キッドが好んで化けているという『工藤新一』ってヤツのことかな。蘭ちゃんのタダの幼なじみの」

快斗が『タダ』のあたりを強調して意味ありげにコナンに視線をやる。するとコナンも負けじと意地の悪い微笑を返した。

「新一兄ちゃんに化けてるんじゃないくて、中森警部に近い『黒羽快斗』兄ちゃんに化けてるんじゃないの、キッドは。もしかして快斗兄ちゃんがキッドだったりして、手品も得意みたいだし」

「ほう。……面白い推理だな、ボウズ」

またしても険悪な空気になったところへ「それはないな」と、低くよく通る声がした。

「中森警部！」

数人の刑事を伴って、次郎吉と共に中森はスタジオに入ってきた。中森は苦々しそうにキッドの変装をしている快斗を見てから、コナンに視線を向ける。

「以前、この快斗君がいる目の前でキッドが盗んで行ったことがある。わしの娘に変装したこともあるし、どうやらわしに近い人間のフリをするのが好きなようだ。快斗君にそっくりな工藤新一の方がもしれんが。一度対決しているしな」

快斗が心底嫌そうに、「オレと同じ顔がいくつもあるなんて、いやなんだけど」とつぶやくと、中森は肩をすくめて「そんなこと、キッドと工藤新一に言ってくれ」と部下達の方へ歩いて行った。

入れ替わりに次郎吉がやってきて感心したようにキッドに扮した

快斗をみやった。

「それにしても、本当にキッドに似とるのう。」

「キッドが勝手にオレの顔を使ってるだけですよ」

まじまじと快斗を見ていた次郎吉は、ガハハと豪快に笑いながら快斗の両肩をバンバンと叩いた。

「このCMが流れたのを見た時の彼奴を見てみたいわ！！　ポスタ―も到る所に貼り出してやる。観客も大喜びだろうて」

快斗は次郎吉と一緒に笑いながら、内心ぺろりと舌を出した。

そう、この次郎吉は、キッドに　もう幾度目だろうか　挑戦状を叩きつけるため、趣向を凝らしてきた。今度は飛空船の中へ盗りに来いというのだが、その挑戦をキッドが受けざるをえないように、大々的に広告をうつ気だ。キッドが好んで変装するという黒羽快斗　つまりオレをキッドに仕立てて、そしてキッドをいつも撃退しているという少年、江戸川コナンとの対決が待っているというような演出で。

（こんな手の込んだ事しなくても、挑戦されれば出向いてやるっつーの。『天空の貴婦人』は探していたビッグジュエルの一つだし、蘭ちゃんが持つっつーんだから尚更、な）

快斗は思いもかけない形で、以前から気になっていた蘭と、自然な形で出会うことが出来た奇跡に感動していた。

（今回ばかりは、感謝してやるぜ。次郎吉さんよ）



「ご機嫌でコナンと園子に付き添われている蘭に近づくと、快斗は蘭に優しく声をかけた。

「あ、だいぶ顔色が良くなったね。着替えて来れる？ 次はもう一回さっきみたいなキスシーンの撮影だよ。蘭ちゃんがウエディングドレス姿の」

「なっ！」

絶句しているコナンの方を、これまた挑発的な視線で見る。

（おもしれえ……）

快斗はコナンの素直な反応がおかしくて仕方がなかった。

「あらヤダ。ホント、急がないと。蘭大丈夫？行くわよ」と、園子に連れられて蘭は着替えに行った。

ヘラヘラとニヤけた顔をしながら手を降って蘭を見送る快斗を、射るような視線でコナンが見上げていた。

快斗の表情の変化を見逃すまいとするように、コナンはじつと快斗を見つめながら口を開いた。

「ねえ。快斗兄ちゃん」

「あん？」

「……本当はキッドなんでしょう」

コナンの訝るような視線に気がついていた快斗は、気づかないフ

りを決め込んでいたが、やっとコナンに顔を向けた。その顔はとも楽しそうだった。

「違うっつーの。キッドがオレに似てるだけだろ。工藤新一に似てるように、な」

快斗は反応を試すように新一の名前を出す。

コナンは一瞬眉間にシワを寄せると、目を伏せ口の端を上げて微笑んだ。

「ふう……ん。そうなんだ。黒羽、快斗……ね」

「呼び捨てにすんな。ガキが」

「よく、覚えておくよ。快斗兄ちゃん」

何もかも見透かしたような瞳で見上げたコナンを見て、快斗は「オレは忘れてくれても、全く構わねーぜ」と肩をすくめた。

コナンはブスツとした顔をして快斗を睨みつけた。

「それから……蘭姉ちゃんはダメだからね」

「なんで？」

「何でって！　蘭姉ちゃんには……オ……新一兄ちゃんがいるから

……」

「へえ……？」

快斗は目を細めてコナンに視線を向けた。

「で？　工藤新一は蘭ちゃんに告白してるワケ？　そして蘭ちゃんはそれにOKしてるワケ？」

「い、いや……まだ……」

「そっか。まだなーんもないワケね。なーんも。……ならオレにも

チャンスあるよな」

「え!？」

「オレも、彼女のこと、気に入ってるんでね。諦める気はねーぜ」

快斗はしゃがみこんでコナンに視線を合わせると、にかっと笑ってコナンの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「……って、新一兄ちゃんに伝えときな。ボ・ウ・ズ」

背後がザワつき出し、蘭が戻ったことがわかったと、快斗は「おっと、花嫁のお出ましだぜ」とコナンの額を軽くつついて立ち上がり、蘭の方へと歩いていった。

コナンは呆然としながら快斗を見送り、ぎゅっと手を握りしめた。

(あ、アイツ……ぜってーキッドだろ!)

**（後書き）**

某快蘭サイトマスター様にネタを頂いたので妄想具現化。

拍手おまけ話あり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0149m/>

---

天空の難破船 | 撮影編 -side Kaito-

2010年10月17日01時39分発行